

## 保育体験は女子大学生の子ども観・子育て観をどのように変えるのか？\*

澤田 英三・上手 由香・奥野 雅子

### How Does the Experience of Child Care Affect Female University Students' Perspectives on Children and Nurturing?

Hidemi SAWADA, Yuka KAMITE and Masako OKUNO

The aim of the present study is to investigate how child care experiences of female university students, who are not participating in a child care worker training course, affect their perspectives on children, nurturing and parenting. Questionnaire surveys and free description observations were carried out both before and after their child care experiences. This investigation reveals that, through these experiences, the students have created a new image of children; that is to say, the students found that children are much more resilient than they had originally thought. Moreover, the students were able to get rid of their preconceived idea that they are not good at nurturing, and then imagine themselves playing with children. On the other hand, the students had ambivalent feelings toward child care through their contact with mothers who are raising a family.

The results of this study show that the experience of child care provides a good opportunity for female university students to learn what it is like to be a mother, and then to realistically think about their parenting and child care.

Key Words: female university students, perspectives of children, perspectives of nurturing, experiences of child care

#### 問題と目的

本研究は、広島県が推進する「みんなで育てるこども夢プラン」(広島県, 2010)の中で検討が進められている「次世代の親育て」に関連して、子育ての経験のない大学生が保育の実習や託児体験、子育て中の母親との関わりを通して、どのように子ども観や子育て観が変わっていくのかを検討したものである。

近年、日本の社会的な問題にもなっている育児不安や虐待の問題は、社会の中で先行していた核家族化、少子化、近隣とのコミュニケーションの貧困化などと無縁ではない。大家族、子どくさんの時代には、子どもの時代から周りに子どもがいるのが当たり前で、子守りをしたり小さい

---

\* 本稿は、平成22年度広島県「若者の子育てと家庭づくりに対する意識の調査研究」補助事業の一部として行われた研究である。

子の面倒を見るのが日常的に行われていた。そして、子どもの時から乳幼児に関する知識や技能を自然と獲得した後に、親として子育てをする時代であった。しかし、核家族、少子化の時代では、乳幼児の世話をしたことがない者がいきなり親になるということも珍しいことではない。そして、そのような状況で自分が親になったとき、子どもへの関わり方に困惑し、育児不安を高めるのも、ある意味では自然の流れだといえよう。

乳幼児の子育てをしている母親を対象にした育児不安に関する研究では、母親になる前に得た乳幼児と接する経験や乳幼児に関する知識が、育児ストレスを軽減するという研究結果が報告されている（中谷・山本，2005）。その中でも興味深い点は、乳幼児に関する知識よりも、自分のきょうだいで出産があって乳幼児と関わる機会があったという経験の効果が顕著であった点である。また、武田・中山・吉田・上條・稲吉（2002）や岩治（2009）が行った女子短大生を対象にした研究では、それまでに乳幼児との接触体験が多い人は乳幼児に対する好意的な感情が高いと報告おり、川瀬（2010）の研究においても同様の結果が得られている。つまり、幼い子どもとの接触体験は、母性準備性（子どもに対する親役割を遂行するための資質）の一因子である乳幼児好意感情に大きく関連しているといえよう。

さらに、安積（2007）や糊沢・福本・岩立（2009）の研究では、妊娠・子育てともに未経験の学生に対して、乳幼児接触体験が養護性（子どもの健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能）に与える影響を検討している。その結果、乳幼児接触体験が多い者は養護性のすべての尺度（子どもへの興味・子どもをうまく扱う自信・養護的役割の受容）が高いという結果を示している。これらの母親を対象にした研究や親になる前の大学生を対象にした研究結果は、おおむねこれまでの子どもと関わる経験やそこで得た知識が、子育てをしていく上でポジティブな影響を与えていることを示すものである。

しかし、野村・河上・長谷・藤原（2007）の研究では、子どもとの接触体験やきょうだい数が多いほど肯定的な子どもイメージをもってはいるものの、子どもとの接触体験は子どもの世話には至っていないこと、接触体験の多さは子どもへの関心とは関連がなく、むしろ苦手意識をもたせる結果になっていたことなどを示している。つまり、子どもとの浅い接触体験は、それがいくらか多くなっても子どもへの関心を高めるどころか、逆効果になる可能性があるというのである。このことは、母性準備性や養護性の育成を考える際に、単に子どもとの接触という「体験」だけを問題にしてはいけないこと、つまり接触体験の「質」を問わなければならないことを示している。

それでは、大学生が実際に子どもと接触する体験をもった場合、子どもに対する認識はどのように変化するのであろうか。佐々木・末原・町浦（2009）は、青年期男女が乳幼児との継続的な接触体験をもつことによって、育児技術や乳幼児の印象・関係性がどのように変化したかを明らかにした。その結果、体験を重ねるごとに、乳幼児の特徴の理解や乳幼児への好意感情、受容、関係性が構築され、乳幼児を肯定的に受け止めるようになり、継続的なふれあい育児体験が親性育成に肯定的に影響していることが明らかとなった。しかし、やはり体験初期や体験後の感想では、戸惑いや緊張、困難を感じていたり、否定的な認識を持つ対象者も見られ、十分な事前事後のサポートの必要性を述べている。佐々木らの研究は、大学生が実際に子どもと接触する体験をもつアクションリサーチであり、その接触体験が子ども理解や親性育成に肯定的な影響があるとともに、単に子どもとの接触経験をもてばよいというものではないことを示す実践的な研究であるといえよう。

ところで、国の子育て支援の内容も、時代とともに変化してきた。たとえば、いわゆる1.57ショックを契機とした1990年代の初期の子育て支援（エンゼルプラン：子どもの問題や異常への対応と親支援、有職女性への両立支援など）から、2000年を境に虐待・育児不安への対応を中心にした子育て支援（新エンゼルプラン：すべての子ども・親への人的・物的・社会的資源への支援）へと変化し、2004年の「子ども・子育て応援プラン」や2007年の「子どもと家族を応援する日本重点戦略」を契機とした次世代の子育てを担う小中高生の育成支援も加わるなど、国や自治体の子育て支援政策も時代とともに転換してきた（吉田，2009）。

そのような中で、高塚（2008）の実践は、若者の子どもや子育てに対する意識を、より現実的で自分の育ちに根ざしたものにしていく実践として注目に値する。高塚の実践は、乳児とその親に複数回学校に登校する「赤ちゃん登校日」を設けて、生徒たちと乳児、生徒たちと乳児を育てる親が関わる体験授業を行うものである。この関わり体験を通して、生徒たちは育児についての体験や乳児との関わり方を学ぶだけでなく、他者を思いやることに気づき、命への畏敬と親への感謝もふくらませることになるという。また、乳児の親にとっても、生徒たちに自分の育児についての体験や乳児との関わり方を伝えることは、大きな子育ての自信にもつながるとしている。つまり、子どもや子育てに対する若者の意識を育む上では、子どもとの接触体験だけでなく、子どもを育てる親との交流が重要な機会となることを示唆しているといえよう。

そこで本研究では、保育者養成課程の所属ではない文系女子学生を対象として、子どもの世話をする体験や子育て支援の現場に参加して育児中の母親と実際に交流する体験を通して、子どもや子育て、ひいては自分が親になることについての意識がどのように変わっていくかを検討することを目的とした。

## 方 法

### 調査協力者

託児・育児サークル等の活動へ参加し、その活動の前後で行った質問紙調査（事前－事後調査）に回答した安田女子大学文系学科の学生29名を対象とした。その内訳は表1の通りである。なお、

表1 事前・事後調査に参加した学生数

活動	事前調査	事後調査	事前－事後調査
NP 講座	9 人	8 人	7 人
発達臨床演習	29 人	20 人	18 人
公開講演会	4 人	4 人	4 人
計			29 人

### 活動の内容と期間

学生が参加した託児・育児サークル実習の内容と期間は、以下の通りである。

1. ひろしま子ども夢財団が主催したNP 講座における託児ボランティア…8回／8週。
2. 本学心理学科の授業「発達臨床演習」における実習…幼稚園・施設実習2回と、育児

サークル等における12時間以上の個別実習。個別実習先は、安佐南区内の未就園児育児サークルあるいは障がい児施設のオープンスペースであった。

### 3. T公民館の母親向け公開講演会における託児ボランティア…1回2時間

#### 調査内容と手続き

事前調査として、託児ボランティアや実習を行う前に、広島県が作成した「子どもや子育てについての質問調査」質問票を行った。質問紙の内容は、家族構成、これまでの乳幼児接触体験(花沢(1992)の乳幼児接触体験質問紙15項目から7項目を選定)や保育体験の有無、養護性尺度(岩治(2009)の養護性尺度45項目から20項目を選定)、乳幼児イメージ尺度(佐藤(2004)が使用した乳幼児イメージ尺度20項目)などであった。

次に、全参加者に活動中に気づいたことをノートにメモするように教示し、活動終了後、事前調査と同じ「子どもや子育てについての質問調査」質問票を行うと同時に、活動中に感じたことを「ふりかえりシート」へ自由に記入してもらった。また、育児サークルでの実習を行った学生には、実習の前後の「子ども」「子育て」「結婚・出産」「親になること」についてのイメージを自由に記述してもらった。

#### 結果と考察

保育者養成課程ではない文系学科所属の女子学生が、託児や子育て支援の現場への参加体験を通して、子どもや子育てについての意識がどのように変わっていったのかを検討するために、体験前後の調査結果にもとづく養護性と子どもに対するイメージの量的な変化と、自由記述による質的な変化をそれぞれ示していく。

#### 1. 体験前後の「養護性」と「子どもに対するイメージ」の量的変化

養護性、子どもに対するイメージともに5件法による尺度であるが、①項目数に対して協力者数が少ないこと、②協力者によって事前-事後のデータの変動が大きいこと、などの理由から、項目を分類するための因子分析や平均値比較は行わず、以下ではそれぞれに基準を設けて項目ごとに対象者個別の尺度値の量的変化をとらえることにより、学生の意識を具体的に検討することを試みた。なお、同じ質問紙を用いた広島県内の大学生を対象とした量的分析結果については、中谷(2011)を参照のこと。

##### (1)体験前後の「養護性」の変化

表2は、「養護性」の各項目に対する事前-事後の尺度値の変化を示したものである。

まず、体験前後に各項目の値がどの程度変化したのかをとらえるために、個々の対象者の変化量をもとに全対象者の変化量の平均値を算出した。そして、体験前後の平均差が0.50以上あった項目、つまり平均して2人に1人が体験前後で変化した項目について検討した。その結果「小さい子どもの相手は苦手である」「子どもはあまり好きではない」という子どもへの苦手意識は減少し、逆に「幼い子どもが泣いていると、何とかしたいと思う」「将来、子どもと遊んでいる自分の姿を想像する」といった子どもを養護する自分を想像するという項目が増加していた。しかし一方で、「イライラして子どもに当たってしまうことのある親がいることについて、仕方がないことだと思う」という親の育児不安に対して理解も示すようになると同時に、「将来、子育て

表2 養護性尺度（子どもや子育て，両親に対する意識）各項目に対する事前・事後回答の変化

質問項目	差平均 <sup>*1</sup>	-変化	+変化	変化数 <sup>*2</sup>
1 赤ちゃんを見ても，別にかわいいとは感じない	-0.20	4	0	4
2 赤ん坊の泣き声を聞くとイライラすることがある	-0.28	8	5	13
3 小さい子どもの相手は苦手である	-0.68	13	0	13
4 テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもって見る	+0.36	3	9	12
5 幼い子どもが泣いていると，何とかしたいと思う	+0.56	2	11	13
6 子どもはあまり好きではない	-0.56	8	0	8
7 イライラして子どもに当たってしまうことのある親がいることについて，仕方がないことだと思う	+0.52	3	10	13
8 幼児の姿をついで追っていることがある	+0.28	3	9	12
9 遊んでいる子どもの声をうるさいと感じることがある	-0.32	11	7	18
10 将来，子どもと遊んでいる自分の姿を想像する	+0.52	5	11	16
11 将来，子育てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する	+0.88	3	13	16
12 出来れば自分も親となって子どもを育ててみようと思う	+0.20	2	5	7
13 私の母親は私の気持ちをよく理解してくれていたと思う	+0.12	5	5	10
14 親は何よりも子どものことを優先させるべきだと思う	-0.28	9	3	12
15 将来，泣く赤ちゃんを前にして，途方にくれている自分を想像する	-0.04	6	8	14
16 将来，育児を楽しんでいる自分の姿が想像できる	+0.24	5	10	15
17 親が自分を育ててくれたように自分の子どもを育てたい	+0.08	3	5	8
18 母親について良い思い出があまり浮かばない	-0.20	5	0	5
19 父親は自分をかわいがってくれたと思う	0.00	4	4	8
20 将来，自分が子どもをうまく育てることができるかどうか不安である	-0.48	13	4	17

\*1 事前事後の変化平均が0.50以上あった項目は□で示した

\*2 事前事後で変化した者が40～60%未満の項目を□，60%以上の項目を□で示した

てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する」というように，自分の子育てに対して苦勞することも想像できるようになるという結果であった。このことは，子どもとの接触を通して子どもへの意識がポジティブなものへと変化するとともに，育児中の親との関わりを通して子育てを自分に引きつけてとらえるようになったために，子育ての楽しさと難しさを感じることができるようになったのだと考える。

そこで，表2のように60%以上の者が体験前後で変化した項目を抽出したところ，その点により明確にとらえることができた。つまり，過半数を超える学生が，「将来，子どもと遊んでい

る自分の姿を想像する」「将来、育児を楽しんでいる自分の姿が想像できる」といった将来育児をする自分の姿を想像したり、「将来、自分が子どもをうまく育てることができるかどうか不安である」といった子育ての不安が減少するといったポジティブな変化がみられた。それと同時に、「将来、子育てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する」といった将来の子育てのネガティブな側面も具体的に想像するようになっており、育児に対する現実に近い両面的な感情を併せもつことができるようになったと推測できる。

#### (2)体験前後の「子どもに対するイメージ」の変化

表3には、「子どもに対するイメージ」の各項目に対する体験前後の回答の変化を示した。

表3 子どもに対するイメージ各項目に対する事前-事後回答の変化

質問項目	差平均 <sup>*1</sup>	-変化	+変化	変化数 <sup>*2</sup>
1 弱い-強い	+0.40	4	10	14
2 たくましい-弱々しい	-0.44	13	4	17
3 おとなしい-やかましい	-0.20	11	7	18
4 無力な-有能な	+0.12	7	10	17
5 うるさい-静かな	+0.16	4	9	13
6 頼りない-頼もしい	+0.44	3	12	15
7 素直な-強情な	+0.12	4	5	9
8 疲れた-元気がある	+0.12	0	3	3
9 生気のない-生き生きした	-0.04	2	1	3
10 きれいな-きたない	-0.24	10	5	15
11 単純な-複雑な	+0.08	5	7	12
12 自由な-不自由な	+0.12	1	4	5
13 劣っている-優れている	+0.36	1	9	10
14 ちいさい-おおきい	-0.04	8	5	13
15 活発な-不活発な	+0.08	3	4	7
16 小憎らしい-かわいらしい	+0.40	1	11	12
17 つまらない-おもしろい	+0.36	0	8	8
18 ゆとりがない-のんびりして	-0.12	9	5	14
19 意欲的な-無気力な	-0.48	10	2	12
20 わがままな-思いやりがある	+0.04	5	7	12

\*1 事前事後の変化平均が0.50以上あった項目は  で示した

\*2 事前事後で変化した者が40～60%未満の項目を  , 60%以上の項目を  で示した

体験前後に各項目の値がどの程度変化したのかをとらえるために、個々の対象者の変化量から全対象者の変化量の平均値を算出した。そして、体験前後の平均差が0.50以上あった項目、つまり平均して2人に1人が体験前後で変化した項目について検討した。その結果、子どもに対するイメージについては、全体の平均としては大きく変化した項目はなかった。そこで、イメージの変化を個別に見ていくこととした。すると、体験前後の変化がプラスに変化する者もいればマ



イナスに変化する者もいて、平均化すると大きくは変わらないという結果になっていることがわかった。つまり、子どもに対するイメージについては個人差が大きいですが、平均すると個人差が相殺されてしまうことが明らかになった。

そこで、各項目の平均値を求めるのではなく、変化した学生数に注目し、60%以上の学生が変化した項目とその変化の方向性を詳しく検討することにした。その結果、子どもは「たくましい」「頼もしい」存在としてとらえる学生が多くなり、想像していたよりも「きれい」というイメージへと変化していた。また、「おとなしい-やかましい」「無力な-有能な」といった子どもイメージの側面では、両方向へ変化した学生に分かれていたことがわかった。つまり、子どもがおとなしいかやかましいか、無力か有能かといったイメージは、それぞれの学生が体験を通して感じた側面が異なるために、両極方向へのイメージに分かれたのだと考えられる。

このように、子どもと関わる体験を通して、子どもに対するイメージは全体的にそれまでのイメージよりも強さを感じる方向へと変化するとともに、子どもへの苦手意識は少なくなって将来子どもと遊ぶ自分を想像する方向へと意識が変わっていった。その一方で、育児中の母親と関わることで、子育てをする自分を想像することができるようになったために、子育てによって生じてくるポジティブ・ネガティブな両感情を身近に感じるできるようになり、それが子どもに対するさまざまなイメージにつながったと考えられる。

## 2. 体験前後の「子ども」「子育て」「親」「結婚・出産」に対するイメージの質的变化

これまでは実習体験をした全29名の「養護性」「子どもに対するイメージ」についての量的な変化をみてきた。そして、学生たちは実習を通して、単に子どもと接触する体験をもつだけでなく、育児中の母親と関わることで子育てを自分に引きつけて考えるきっかけになったことが明らかになってきた。そこで、特に未就園児の育児サークルに参加して子どもや母親と関わる体験をもった学生に、どのようなイメージや意識の変化が生じたのかを、学生たちの自由記述をもとに具体的に明らかにしていくこととする。

表4は、未就学児を育てる母親たちの自助グループに参加した学生のうち、先の事前事後調査の「養護性得点」において変化が大きかった5名の学生を抽出し、体験実習を通して「子ども」「子育て」「親」「結婚・出産」に対する意識やイメージが具体的にどのように変化したかを示したものである。実習前のイメージは、内容ごとにカテゴリー化し、< >で示した。

表4 自由記述による体験前後の「子ども」「子育て」「親」「結婚・出産」に対するイメージの変化

	実習前のイメージ	実習後のイメージ
子ども	<愛護される対象としての子ども> 可愛くて癒される	→ 可愛いけど毎日一緒に過ごすとなるとイライラもするし、怒ってしまうこともあるし、お金もかかる
	<弱者としての子ども> 可愛いが弱くてもろい	→ 子どものぬくもりを感じれた 泣き・笑い・怒るといった表情が豊かで、自由に生きている 子どもはいろんな人から守られて生きる幸せを感じている 言葉が話せなくても目で意志を伝える、繊細だけど力強く生きている

子ども	<p>&lt;接触経験の乏しさによる苦手意識&gt; まったく子どもと関わったことがなく、 苦手意識があった</p> <p>&lt;子どもをもつことへの否定的意識&gt; 子どもを産みたいとも思っていなかった</p>	<p>→ 自分の小さかった時と重ね合わせて、子どもの気持ちを理解することができた。子どもや有能で一人一人個性があることに気づけた</p> <p>→ 可愛くて自分の子どもだともっと可愛いのだろうなど感じる。子どもの成長を親だけでなく、周りの人とも楽しみたい</p>
子育て	<p>&lt;孤独・未知な体験への不安&gt; 不安、孤独。知識がなくても誰も助けてくれない どこか未来の世界の話</p> <p>&lt;虐待する親への拒絶感&gt; 虐待をする親が信じられなかった</p> <p>&lt;未知の体験への不安&gt; 育児について知らないから大変そう、否定的なイメージ</p> <p>&lt;未知な体験への不安&gt; 自分が子育てをする自信がない</p> <p>&lt;子育てへの関心の乏しさ&gt; 育児サークルなどの存在すら知らなかった</p>	<p>→ 子育ては一人でやるものではなく、子育てサークルもあり、周りに支えてくれる人がいて、ママ友もできたりと、周りの環境次第でいくらでも楽しくできる わからないのは最初はみんな同じ</p> <p>→ 毎日朝から夜まで二人きりでいると子どもに手を挙げてしまう理由もわからなくなる。親に心の余裕がないためにおこる</p> <p>→ 知らないから悪いイメージばかりが強くなっていて 知らないことに対して不安になりやすい</p> <p>→ わくわくしていて、子育てする自信があると言える。子育てのテクニックだけでなく、不安になった時、一人で抱え込むのではなく、地域の人に甘えても良いことを学んだので</p> <p>→ 情報交換、子どもの相談、子どもはいろいろな子どもと触れ合うことができ成長、親もストレス解消になり、家庭で子どもと良い関係を築くことができると感じた 子育てが初めての人でも、こういったサークルを利用することで不安もなくなるだろうし、一人で子育てをしているのではないということがわかるようになる</p>
親	<p>&lt;自己犠牲的な母親&gt; 母親は子どものため家族のために生きていくというイメージ</p> <p>&lt;全責任を負う母親&gt; すべて自分が一人でどうにかしていけないといけなく、それが母親になるということなんだ</p> <p>&lt;親になることへの心理的隔たり&gt; 実感も想像もできなかった</p>	<p>→ 子育てを否定的にとらえているお母さんはいなかったし、それよりも楽しいという意見が多かった。お母さん達はいろいろな人とのつながりがあり、積極的にいろんな所に向いたりして人生を充実させているからこそ子育てを楽しんでいる</p> <p>→ 大変なときはベビーシッターや信頼できる人に子どもを預けてリフレッシュしたり、人のつながりを大切にしながら子育てを楽しみたい</p> <p>→ 「自分が小さかったとき、親はこう思っていたんだな」「今まで気付かなかったけど、こんな不安を抱えて子育てをしていたんだな」と、自分の親の気持ちもわかるようになった あらめて親の偉大さ、感謝の気持ちが芽生えた</p>
結婚・出産	<p>&lt;自己犠牲&gt; 自分の時間がなくなり、良いことなんてない 辛いことが増える</p> <p>&lt;不安&gt; 子どもが産まれる喜びよりも産まれてからの不安の方が大きかった</p>	<p>→ 悩むことが増えるが、それが必ずしも辛いことにつながるのではなく、家族ができた証だと考えるようになった</p> <p>→ お母さん方から、育児の大変さや結婚生活のグチだけでなく、夫の話、子どもの成長の話など、心温まる話もたくさん聞けて、子どもを産みたいっ！と思うようになってきた</p>



### (1) 「子ども」についてイメージの変化

実習前の子どもに対するイメージは、「可愛い」という＜愛護される対象としての子ども＞のイメージであったり、「弱くてもろい」と＜弱者としての子ども＞のイメージにとどまっていた、概して表面的であった。また、「子どもを産みたいとも思っていなかった」という否定的な記述がみられるなど、子どもを持つことへの何らかの否定的なイメージがあることや、今の時点では自身の将来展望に子どもをもつことが位置づけていない段階であると考えられる。そして、それらは子どもとの接触経験の乏しさから子どもに対する苦手意識を感じているようであった。このように、実習前の「子ども」に対するイメージは、肯定的なものとしては、可愛らしく庇護されるべき対象としてのイメージが抱かれているが、まだ表面的で漠然としたものであり、子どもと接する体験の乏しさが、子どもへの苦手意識を生じさせている場合があることが推測される。

しかし、体験実習後の「子ども」に対するイメージは、体験実習前に比べ、豊かで生き生きとしたものになっている。実習前の子どもの存在が単なる愛護されるべき可愛い対象としてのイメージから、「イライラもするし、怒ってしまうこともある」、「泣き・笑い・怒る」など、子どもと接することで生じるネガティブな感情も含めて、より複雑で豊かなイメージへと変化している。さらに、実習前に＜子どもをもつことへの否定的意識＞をもっていた学生が、子どもに対する「可愛い」という肯定的イメージを抱くようになっていく。また、「子どもの成長を周囲の人とも楽しみたい」というように、体験実習を通して学生は、子育てを母子の二者関係という閉ざされたイメージから、周囲の人との協力も含めた、より開かれたイメージへと展開させていることがわかった。さらに、子どもへの苦手意識を抱いていた学生が、自分自身の子ども時代を振り返る機会にもなっていた。

このように、保育体験を通して、子どもに対して「苦手意識」のあった学生が子どもを「可愛い」と思うようになっただけでなく、自分に引きつけて「子ども」のことを考えるようになったといえよう。特に、「子どもに関わったこともなく苦手意識があった」「子どもを産みたいとも思っていなかった」学生でさえ、育児サークルという場で子どもと関わる経験を通して、「自分の小さかった時と重ね合わせて、子どもの気持ちを理解」していた。さらに、将来の「自分の子ども」をイメージするようになったという変化は、子どもや子育てに関心をもたない若者においても、子どもと接触体験が自分自身の子ども時代を振り返る機会となっていることを示している。

### (2) 「子育て」についてのイメージの変化

体験実習前の「子育て」に対するイメージは、すべての学生が何らかの否定的イメージを抱いていた。たとえば、子育てを＜孤独＞なものとしてとらえていたり、今の自分自身が育児への知識が乏しいために、＜未知な体験への不安＞を抱いていた。さらに、＜虐待する親への拒絶感＞を表現した学生がおり、社会的には一般的な意見ではあるが、この時点では養育者に対するイメージも一面的であるともとらえることができる。子育てが自分にも差し迫った体験としてイメージされていないからこそ、虐待する親の心情を自分と切り離してとらえているといえる。

それに対して、体験実習を終えた学生の「子育て」に関するイメージは、「一人で子育てしていいのではない」という思いのように、子育ては母親一人で背負い込むのではなく、周囲と協力しながら育てていくイメージへと変化している。そしてこのイメージの変化が、「わくわくしていて、子育てする自信がある」というように、自分自身の子育てに対して、仮ではあっても自信につながっていると思われる。また、体験実習前に＜虐待する親への拒絶感＞を示した学生は、実習を経て、「子どもに手を挙げてしまう理由もわからなくなる」と一定の理解を示すよう

になっただけでなく、「親に心の余裕がないために」虐待が起こることを感じるようになり、育児サークルなどの子育てでコミュニティの果たす役割をよりいっそう認識するようになったといえる。

### (3) 「親」についてのイメージの変化

体験実習前の「親」に対するイメージは、＜自己犠牲的な母親＞、＜全責任を負う母親＞というように、母親が自分のすべてを家族や子育てに捧げ、子育ての全責任を負うというイメージが抱かれていた。このような母親イメージは、女性としていずれ母親になることに対する気負いを強め、先述の「子育て」イメージでみられた＜孤独＞や＜未知な体験への不安＞と相互につながっていると考えられる。また、「実感も想像もできなかった」という言葉からは、親になることは現在の自分からは遠く隔たりがあり、イメージすることさえできないという状態であった。

それに対して、体験実習後の「親」イメージは、「子ども」「子育て」イメージの変化にも表れていたように、周囲の人とのかかわりの中で子育てをするというイメージに変化している。子育てサークルでの母親とのやり取りを通して、母親が子育てを一身に背負うのではなく、地域にあるさまざまな支援を活用しながら、自らも人生を楽しんでいる姿を知る機会になったようである。また実習を通して、自分の幼少期の親とのかかわりを振り返り、親への感謝の気持ちを抱いたという記述もみられた。つまり、それまでの自身の親子関係では常に子ども側の視点でいた学生が、実習で出会った母親のわが子への関わりを目にすることで、母親側の視点が内在化され、自らの親との関係をとらえ直す契機となったといえるだろう。このように、子育てサークルでの体験実習は、学生の子育てに対するイメージを変化させただけでなく、自分自身の親子関係も新たにとらえ直す機会を生じさせたといえよう。これは、高塚（2008）が実践する「赤ちゃん登校」がもたらした自分の親への感謝の念をもつようになることと同じ変化でもある。

### (4) 「結婚・出産」についてのイメージの変化

体験実習前の「結婚・出産」のイメージについても、「親」イメージと同様＜自己犠牲＞的な不安がみられる。これは学生が家庭そのものに対して、自己を縛るイメージを抱いているからだと考えられる。その背景には、「親」イメージで表現されたように、母親として家族に人生を捧げるイメージが影響を与えている可能性や、夫との関係性でも自立した者同士の二者関係ではなく依存的な夫婦関係がイメージされている可能性が考えられる。また、青年期特有の他者との親密な関係を構築することへの不安が現れているとも考えられるだろう。

体験実習を終えると、「結婚・出産」に対するイメージは、ネガティブな側面があっても、それは「必ずしも辛いことにつながるのではなく、家族ができた証」ととらえることができるようになっていた。また、「子どもが産まれる喜びよりも産まれてからの不安の方が大きかった」体験前の思いから、「お母さん方から、育児の大変さや結婚生活のグチだけでなく、夫の話、子どもの成長の話など、心温まる話もたくさん聞いて、子どもを産みたいっ！と思うようになってきた」という。このように、育児中の母親から直接結婚生活や育児の両価的感情の話を書く体験が自分が子どもをもつことに対する気持ちを前向きに変化させたと考えられる。

このように、子どもに関心がなく子どもとは関わらない生活を送っている保育者養成課程以外の学生にとって、子どもと関わる接触体験は子どものことを肌で感じる貴重な体験となることはいうまでもないが、ただ子どもとの接触体験をもつだけではそれがネガティブな経験となることも予想されていた（佐々木・末原・町浦，2009）。しかし本研究のように、育児中の母親が自分たちでつくる育児サークルに参加することは、世話をされる子どもの姿や世話をする母親の様子

を見るだけでなく、学生たちにとって自分たちの先輩である母親から話を聞くことで、子どもや子育て、ひいてはその前に経験する結婚のことを自分に引きつけてより現実的に考える契機となっているといえよう。

## 結 論

本研究では、保育者養成課程以外の文系女子学生を対象として、託児経験や子育て中の母親との関わりを通して、以前からもっていた子ども観や子育て観などがどのように変化したかを具体的に検討した。

学生たちは、子どもと関わる体験を通して、子どもに対するイメージは全体的にそれまでの子どもイメージよりも強さを感じる方向へと変化するとともに、子どもへの苦手意識は少なくなり、将来子どもと遊ぶ自分を想像する方向へと意識が変わっていた。また、育児中の母親と関わることを通して、子育てによって生じてくるポジティブ・ネガティブな両感情を身近に感じることができるようになり、それが子どもに対するさまざまなイメージにつながった。一方で、子どもと関わる接触体験は、子どものことを肌で感じる貴重な体験にはなるが、佐々木・末原・町浦（2009）が指摘しているように、ただ子どもとの接触体験をもつだけではそれがネガティブな経験となることもある。しかし、育児中の母親が自分たちでつくる育児サークルに参加して、世話をされる子どもの姿や世話をする母親の様子を間近で見ただけでなく、実際に子どもたちと関わり、学生たちにとって自分たちの先輩である母親から話を聞くことで、子どもや子育て、ひいてはその前に経験する結婚のことを自分に引きつけてより現実的に考える機会となったといえよう。

ここで、複数の親子がともに子どもと関わる「育児サークル」の場で、「育児中の母親」から直接話を聞くことの重要性をあえて強調しておきたい。目的でも述べたが、現代社会は核家族化、少子化、近隣とのコミュニケーションの貧困化が問題となっている。将来的にも地域の中に、自然発生的に子どもが集まり、親が集まる場ができることは期待できない。それでは、そのような社会の中で育つ若者は、どのようにして子どもと関わり、育児中の母親と関わるのであろうか。それは、子育てをする親子が自分たちでつくっている育児サークルという「コミュニティ」に参加することが考えられる。これは、子どもや育児中の母親と関わりながら若者の子どもや子育てに対する意識を高める点では高塚（2008）の実践する「赤ちゃん登校日」と同様ではあるが、進める方向としては逆の方向である。つまり、高塚は学校という若者のコミュニティに子どもと母親が参加するのに対して、本研究は母親がつくる育児コミュニティに若者が参加するのである。そして、多くの育児サークルでは、若者の参加を先輩である母親たちは歓迎してくれている。ただここで注意しておかなければならないことは、母親たちの自助グループの動きが、ややもするとある特殊な方向に向かったり、世間の噂や流行に押し流されて進むことがあることである。そのような動きを指摘する意味でも、そのサークルもしくは若者の側に助言をしてくれる専門家をおく必要があるかもしれない。今後の施策としては、単に若者と育児中の親子が出会う場をイベント的に設定するだけではなく、若者が出向くのか若者が迎えるのかは別として、若者と育児中の親子が温かい雰囲気の中で継続的に接触することができる場を設けることが望まれる。

## 引用文献

- 安積陽子 2007 看護系・福祉系大学生の養護性の形成に関する一考察：性別と乳幼児接触体験との関連から 甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編），1，23-28.
- 花沢成一 1992 母性感情の発達 花沢成一（著）母性心理学 医学書院，pp.79-85.
- 広島県 2010 みんなで育てる子ども夢プラン 広島県
- 岩治まとか 2009 大学生における養護性の検討 東京家政大学研究紀要，49(1)，133-142.
- 子どもと家族を応援する日本重点戦略検討会議 2007 「子どもと家族を応援する日本」重点戦略 厚生労働省
- 厚生労働省 2004 子ども・子育て応援プラン 厚生労働省
- 中谷勝哉・山本クニ子 2005 育児関連ストレスと妊娠前の母親の経験・知識 発達研究，19，151-163.
- 川瀬隆千 2010 大学生の親準備性に関する研究 宮崎公立大学人文学部紀要，17(1)，29-40.
- 棚沢令子・福本俊・岩立志津夫 2009 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性(nurturance)へ及ぼす影響 教育心理学研究，57，168-179.
- 中谷隆（編）2011 若者の子育てと家庭づくりに対する意識の調査結果報告書—持続可能な次世代の親育ての取組に向けた提言— 平成22年度広島県「若者の子育てと家庭づくりに対する意識の調査研究」補助事業調査研究報告書
- 野村幸子・河上智香・長谷典子・藤原千恵子 2007 子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ 人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌，7(1)，169-180.
- 佐々木綾子・末原紀美代・町浦美智子 2009 青年期男女の親性を育てる乳幼児との継続接触体験の内容分析による評価（第1報）思春期学，27(3)，270-282.
- 佐藤洋美 2004 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響 生活体験学習研究，4，35-54.
- 高塚人志 2008 赤ちゃん力—人との関わりが人を育む エイデル研究所
- 武田奈美・中山淳子・吉田恵理・上條育代・稲吉久美子 2002 女子短大生における乳幼児接触体験による母子準備性への影響 飯田女子短期大学看護学科年報，5，205-221.
- 吉田ゆり 2009 子育て支援の展開とまちづくりの関連について 京都女子大学『現代社会研究科論集』，3，69-81.

[2012. 9. 27 受理]